

(一七四四—一八〇三)の門人・竹井大業(詳細不明)から東郭による治験例を学んだというから、篤胤も古方派の医者として開業していたようである。しかし、一方では、最近ようやく皇国本来の医薬の道が再興しつつある情勢を喜んでゐる。「然るに近頃、わが古学の興りたるより、此道も開け初て、漢方に依らず医療を為す者も、かつかつ出来たるは、然すがに神の御国の印にて、いとも愛たきこととござる。」と。ここで篤胤は「和方」と称すべき医方の一分野が自分の門下に興起したことを誇りとし、その発展に期待していると思われる。篤胤の真菅乃屋時代の塾生に森川宗円なる人物があつて、和方家を自任したということが、早く富士川游により指摘されている。

『鑒宗仲景考』は「大壑君御一代畧記」によれば、文政一〇年(一八一二)の条に「鑒宗仲景考刻成」と記されているので、『志都能石屋講本』とは時期的にかなり後に著されている。その二年前に『葛仙翁伝』が書かれているのを始め、その前後には『五嶽真形図』『黄帝伝記』など道教經典にかかわる著作が多い。本書の内容は「伊吹能舍先生著撰書目」によれば、「古今の偉人、傷寒雜病論、金匱要略方論を医薬の祖典と尊奉するに、其の撰者を張機、字は仲景と伝へ来つれど、史籍に其傳なきことを遺憾に思へるに、此は葛玄、字は孝先と云ひし、真人の寓名なる由を、諸書に徴して、委曲に考へ記されし物なり」と説明されている。つまり、『傷寒雜病論』『金匱要略方論』の撰者を葛玄だと推定し、その文献的考証を試みた著作であり、篤胤なりはかなり広範囲に、緻密に推論を行っている。おそらく、多紀元簡の『医賸』を引用していることでも知られ

るように、当時の医学考証学派の文献実証主義を模倣したかと思われるが、先ずは、現行本『傷寒雜病論』の伝承に疑いを抱かず、残念ながら強引な独断的な推論、考証に終始することになっている。しかし、『傷寒雜病論』を葛玄のような道教的人物と関連づけようとしたことに興味を覚える。

前橋神女と平田門人たち

三 三 松 誠

明治新政府内部に地位を得つつも、維新官僚との対立を深めた攘夷派としての平田門人たちは、政策に対し、直接的な影響力を発揮できず、様々に批判的行動を展開した。そんな明治三年の冬、前橋神女の示した神異の話(後に友清歛真が紹介している)を聞きつけた平田直門の重鎮の幾人かは、神々の權威によつて自分たちの信条の正統性を担保してもらうべく、この、春と名乗る靈媒に、様々な問いを投げかける。春の伝える神々の世界は、平田派的な要素によつて彩られているものの、いざ平田学のスピリチュアルな部分をよく受容した人々を前にすると、政策に関する具体的な期待や、細かな神学的質問に対してなど、十分には答えることができなかったところも窺える。他方、国学者内部の争いのはざままで苦しみ平田家三代目延胤は、この一件について、信用しきることなく、弟子たちの不平を抑えるという政治的効果にまず期待していた。

結局、矢野玄道らの主要門人は、この一件に関わった直後の

明治四年三月、一斉に捕縛されることになる。対立のさなかで苦しんだ延胤も病に伏し、間もなく病没する。

政府内部の主流派との対立のさなかでありながら、前橋神女の声に耳を傾けていたことは、政局史上貴重な時間を浪費させ、彼らの没落を早めることにつながったのかもしれない。自分たちの夢見た復古が実現されないことを嘆く中で、政治への願望を「幽界」に仮託したこの営みは、所詮はキース・トマスが言うところの「魔術」、すなわち「効果的な技術がないとき不安緩和のために実効のない技術を用いること」でしかなかったのだ、と言ってもそう誤りではあるまい。平田直門と対立した津和野派の頭目、大国隆正に言わせれば、「おのれもそのはじめは、しきりに幽界のことをとひなどしたりしを、いまおもへば、よしなしことにてありしなり。顕露・幽界あひかよはぬは、神道のおきてなり。」

とはいえ、スピリチュアリズムが政治運動に携わる主体を鼓舞するものとして機能したその有様は、平田国学が明治維新において果たした役割を確かによく示しているはずである。

自然災異の神道的表象の

認知宗教学的アプローチの試み

井上順孝

認知科学で展開されている議論の中には、宗教研究に直接的に関わるようなものが含まれている。少なくとも次の二つは重

要である。一つは脳科学の進歩により、人間の認知の仕組みについての新しい見解がもたらされたことである。もう一つは、マクロな問題であり、そもそも人間が宗教というものをもった理由に関わる新しい説である。進化的適応環境(EEA)、二重相続理論(DIT)、ミーム理論など、新しい概念や理論が提起され、人間がある「信念」に捕捉されてしまうことに関する幅広い議論がなされている。

ここでは、主として二つ目に関わる議論を扱う。K・スタノヴィッチの「二重過程理論」を中心に、認知科学的なアプローチを宗教研究に適用すると、従来の宗教研究とどのような点で新たな視点が得られるのかを検討する。スタノヴィッチの二重過程理論は、人間にはTASS(The Automatic Set of Systems)と分析的システムという二重の認知機能があるとする。ここにおける人間観は、遺伝子とミームという二つの複製子に影響を受ける存在であり、この二つの複製子に対し、人間は宿主(乗り物、ロボット)にたとえられる。宗教的信念を含む信念一般は、ミーム複合体として扱われている。しかし、進化心理学で主流をなすEEAを重視する見解には疑問を呈し、メタ合理性を追求すべきことを力説する。ここでの議論が従来の文化論と異なるのは、遺伝子もミームもひたすら複製を目指すということに注意を喚起し、そのことを人間が自覚すべきだとしている点である。

こうした見解を、自然災異に関する神道的表象に対して議論してみるとどうなるか。自然災異の表象は、これはウェーバーが注目した「苦難の神義論」に含めうるテーマである。この表